

～旧約聖書を読んで感じること～ (40) 士師記(7)士師サムソンとペリシテ人の妻

サムソンはペリシテ人を探りに、ティムナに行きましたが、そこで一人のペリシテ人の娘に魅せられてしまいました。好きな女性と結婚できたサムソンはその土地の若者の習慣に従い7日間の宴会を催しました。30人の客がやって来ました。上機嫌のサムソンは、つい、ライオンの件で得意になり、謎々ゲームを持ちかけました。その謎に賭けも付けました。皆が応じたので、「食べる者から食べ物が出た。強いものから甘いものが出た。な～んだ?」と言ったのです。



謎をかけるサムソン James Tissot

彼女は怯えて毎日サムソンに謎の意味を問い質しました。

「あなたはただわたしを嫌うだけで、少しも愛してくださらず、わたしの同族の者にかけてたなぞの意味を、このわたしにも明かそうとなさいません。」(士 14:16)

連日、しつこくせがみ、泣きすがったので、サムソンは7日目に妻にライオンと蜜の件を話してしまいました。そこで妻は謎の意味を男たちに伝えたのです。サムソンは賭けに負けました。賭けだけでなく、妻の裏切りに対しても、怒り狂ったのです。別の町で強奪したもので、賭けの払いをし、父の家に帰ってしまいました。この時、妻はなぜ脅迫されていることをサムソンに言わなかったのでしょうか。サムソンは彼女を嫌うどころか愛していたのに。サムソンは妻の「責め立て、泣き落とし戦術」に落ちたのです。



Vatopedi 僧院 13c.

それを知ったサムソンは、愛する人を失った悲しみで、報復せずにはおられず、怒り狂い、ペリシテ人を徹底的に打ちのめしてから、エタムの岩の裂け目に逃げ、そこに住みました。



ロバのあご骨で戦う James Tissot

しばらくしてサムソンは気を取り直し、お土産を持って好きな妻のもとを尋ねました。ところが舅は「あなたが娘を嫌ったと思い、あなたの供の者の妻としてしまった。娘の妹を代わりに妻にしてほしい」と言ったのです。サムソンは本気で怒り、今度こそペリシテ人を痛めつける正当な権利があると思いました。そこで、300匹のジャッカルの尾と尾を結びつけ、松明を取り付け、収穫間際の畑に送り込みました。麦、ぶどうの木、オリーブの木を燃やし尽くしました。大損害を与えたのです。

ペリシテ人はサムソンの仕業と知りました。その訳も知りました。そこで彼らも怒って、サムソンの舅と妻に火を放って焼き殺してしまいました。

ペリシテ人はユダ族にサムソンを渡せと言って来ました。ペリシテの支配下にあったからです。サムソンは責められましたが、「彼らがわたしにしたように、彼らにただけだ」と言いました。危害を加えないからと約束し、同胞はサムソンに縄をかけ、ペリシテ人の元へ連れて行きました。

ペリシテ人は歓声を上げてサムソンを迎えました。その時、主の霊がサムソンに降り、縄目は解けました。サムソンは真新しいロバのあご骨を見つけて、それで1000人を打ち殺しました。サムソンは非常に喉が渇きました。神に祈り求めると窪地から水が湧き上がり、サムソンは元気を取り戻しました。

こうしてペリシテに勝って、サムソンは士師となり、20年仕えました。